人特集〉

病気の時〈こうなる〉

―医療センター、市更相、救急車 聞き歩き―

病気・医療特集を組むということで、釜の中で医療に関係のある公の組織・民間団体（？）を訪ねることにした。

一つは、昨年一二月二五日から、〝仲間の中から凍死者を出さない、シノギ追放〟を主たる目的として、パトロールや医療相談などを行なっている「第七回釜ヶ崎越冬斗争実行委員会医療班」。いま一つは、日本一の出動回数と言われている「西成消防署海道出張所救急隊」。そして、敗戦後三一年後経た現在に至ってもロクなオトシマエをつけない国家に、敢然と立ち向う「釜ヶ崎被爆者の会」。

現在病気にかかっている人、将来病気になった時にどうすればいいか、と不安を感じている人達に、少しでも役に立つようにと考えて、それらの組織がどのような活動をしており、イザ、という時にどうすればいいか、を中心に話を聞いてみた。

仲間から凍死者を出すな!!

第七回釜ヶ崎越冬闘争実行委
医　療　班

医療班の活動内容をさきに紹介すると、
①午後八時と午前二時の二回行なわれるパトロール
②仏現寺公園のテント村で行なわれている医療券の発行
の二つが主要なもので、その他に、各種行政機関に対する手続の相談などもやっている。

※パトロール

パトロールは午後八時と午前二時の二回、二班に別れて行なわれている。

一班は霞町から浪速警察のある国道まで行き、公園をまわって新今宮の駅を抜けてくるコースを巡回。

もう一班は、「あいりん総合センター」の南、南海電車のガード下で東西の二つに別れ、三角公園の南側の便所で落ち合って戻る。

パトロールする人数は、午後八時の時で大体三〇名ぐらい。ほとんどが労働者であるが、いつも七～八名、キリスト教関係の支援の人が参加している。

巡回はたき火を囲んでる人達に「大丈夫か」と声をかけたり、「わしらは大丈夫やけど、あすこで一人うずくまってるで」と教えてもらったりしながら、火の気のないところで一人うずくまっている人を、リヤカーに乗せてテント村に連れて帰る。

治療は、道具もないし、薬や消毒液の使い方なども支援の医者や看護婦に習ってやっている程度なので、ちょっとした火傷、スリ傷、打撲傷の手当てをしたり、かぜ、頭痛、腹痛に対しての投薬ぐらいしか出来ない。

それでも、一日五人から一〇人を治療している。治療する場所は大体毎日決っており、三角公園とシ・ンペンガード西にある「ひろば」が多く、治療件数の九〇％をその二ケ所で行なっている。治療する人も毎日似たような人が多いが、三角公園はどういうわけか人の入れかわりが激しい。

ちなみに、一二月二五日から一月一三日までに医療班が確認した青カン者累計三一七九名（一日平均一五九名）一番多い日は一晩で二百二～三〇名。三角公園だけの最高は一晩で百三～四〇名。

なお、二月二日付朝日新聞朝刊〝長びく不況にあえぎ／あいりん野宿者に続く夜間パト／延べ三百人以上保護〟

の記事より、二月一日未明までの数字を紹介すると、一時保護延べ百人、救急車を要請して入院した者三七人。野宿中に衰弱などで路上死した人はすでに三人。

パトロールしていて感心したのは、一時三～四人のグループが、多分リヤカーででも集めてきたのだろう、三～四日ボンボン燃やしても無くならない程たき火の材料をごっそり積んで青カンをしているのを見た時だそうだ。

やはり一番危いのは、一人か二人で青カンしていて種火がなくなることで、そうならないように材料をたくさん集めておくことが肝要。

巡回の警察官も、以前は日中の三角公園などではたき火を消したりしていたが、最近はあまり消さなくなったようだ。昨年一晩に三人か四人凍死してるのに行政はこりてるように見える。

消される可能性が高いのは紙を燃やしているところと、テント村で大きなたき火をしている時ぐらいのようで、コンクリの横手で木を燃やしている分には大丈夫のようだ。

なんせこの寒さ、夜間に暖をとるたき火を消すことは死につながるから……。

※医療券の発行

医療券は医療センターで治療を受けるためのもので、氏名、年齢、出身地または現在居るところ、病状、過去の入院・通院の有無、そして日雇手帳を持っているかどうか、などを記入するようになっている。

午前九時から一〇時まで受付けて、全員まとまって医療センターにでかける。

医療センターでは治療をしてもらい、市更相へ行くための手紙（診断書）を書いてもらう。

医療券発行で多いのは、打撲傷、胃炎、肝臓障害、結核。打撲や火傷で特に目立つのは下半身に集中していること。上半身はあまりない。やはりたき火にあたっている時の火傷と、歩いている時などに足をぶつけたのか、寒さのために段々痛みを増してくる、というのが多いようだ。

足の傷で注意しなければならないのは、清潔にするということで、中には足の一倍半ぐらいにふくれあがってゴぐる人もいる。

足袋と長ぐつでは、足袋の方が風通しがいいせいか早く直る。当った時は地下足袋の方が痛いが、直りは早い。

とういうのを〝痛しかゆし〟という？

発行枚数は一日平均八～九枚、一二月二五日から一月一三日までの累計は一六八名となっている。一番多い日は二〇枚の発行。

昨年、一昨年あたりと比べると医療センターへ出掛ける人が減っているようだが、これは医療センターへ行って治療してもらったかて、一パツで入院させてくれるわけやなし、施設に入れてくれるわけやない、それやったらわしら行ったかて一緒や、というヤケッパチな傾向があることが原因と思われる。そういう点にヤケッパチになるのは市更相のせい。

㉓大阪市更生相談所

大阪市更生相談所はシロンベンガードの東通路を一つ渡った所にあり、文字通り様々な更生相談をすることを仕事としているが、役人気質まるだしのエラソーな係員の対応で有名。

医療センターで手紙をもらった人達は一度テント村に戻り、昼食の後に一人の付き添いと一緒に市更相へ行き、病院や施設を紹介してもらうことになる。初めての人なら、施設や病院がすいている時は紹介してくれるが、空きのない時は八百円渡してまた明日、ということで帰される。以前に強制退院などの経験があると、まず受け付けてもらえない。

一番長く通った方の部類で五回というのがある。

この人は、夏に総合センターの上でゴロ寝している時に、一段高いところから落ちて頭を打ち、半身不随になって長く大和病院に入院していたが、正月に、多分、看護婦などの人手の関係だろうが、半身不随のまま退院させられたもので、不自由な身体を五回運んでようやく入院先を紹介してもらった。

役人気質まる出しな例を一つ。

結核の人が市更生に行ったところ、発生が浪速区だから、というのでけられた。行政のタライ回しか、と思ったが、浪速区の方ではすぐに手続きをしてくれ、その人は長居の病院に入院することができた。

市更相なんぞは無い方が仲間が助かる。それは正月三ケ日ごろ見事立証された。

暮れの二九、三〇日、行政は市更相を通じて臨時宿泊所の斡旋を行なったが、人数の制限を口実に多くの病人がはねられ、青カンを余儀なくさせられた。ところが、市更相が窓口を閉めた正月三ケ日は、百％入院を必要とする人は入院したし、通院の必要がある人は総て自彊館にはいれた。

自彊館の収容人数は約一一〇〇人、臨時打ち切りの時点で八〇〇人収容していただけだから、ベット数から言っても三〇〇人近くはまだ収容可能だった。その上自彊館としては、収容人数に余裕がある限り、医者の診断書があれば受け入れる、ということだったので、今まで市

更相ではねられていた人も含めて収容ワク一杯まで入れたということだ。

一月四日から市更相が窓口を開けると同時に、またたや大半の人がはねられることになった。

ともかく、市更相が最大の難物で、大半の人は三回も通ううちにイヤになって、もうええわ、ということになる。

だが、どっちみち病気で仕事に出掛けるわけにはいかず、時間はタップリあるのだから、そしてテントやっている間は、朝はゾウスイ、夜はカタメシ、寝るところはセンターの下、と最低限の生活はできるのだから根気よく通って、なんとか健康を取り戻すことが第一だろう。

なんせ元気で動けるのだったら、市更相みたいなところで、施設やら病院を紹介してもらうことはないのだから。

市更相へ行くと係員が必ずエラソウに言うから、その挑発に乗らないように、わしらかて普通の人間やから、なんでエラソウに言われないかん、もうちょっと静かに、おだやかに話し合いましょう、と普通の態度で対応することが肝要で、むこうが大きな声を出したからと言って、同じようにカーッとしたらむこうの挑発に乗ることになる。卑屈にならずに普通の態度で、そして、係員にも普通に話すよう求めること。

⑤救急車

医療班は救急車を呼ぶことが多い。一番多い時は一時間程の間に、五～六台たて続けに呼んだことがある。

その日はとてつもなく冷えた晩で、パトロールでセンターの下まで運んだものの、やはりそこではもちそうもないので救急車を呼んだ。一台目が来たらその救急車の無線を使ってまた次の車を頼む、という忙しさだった。

出動してきたのは、海道出張所、西成消防署、覆町の出張所、天王子消防署など。

ともかく救急車を頼むときは、医療班には医者もいないし、救急医療の免状をもっているものもいないので、やはりモチはモチ屋、相手に任している。ただ医療班としては名前と住所と痛いとこを聞き、あとで消防署へどこへ入院したか、自分で帰ったかなどを問い合わせることができるようにはしているし、消防署の方も教えてくれるそうだ。

タライ回し、というのは無いようで、一件三軒目で入院したのがあるだけ。

その人は最初頭を打って、ただ頭が痛いということだったので、先ず大和へ行き、そこから阪和病院に運ばれて長い時間診察した結果、阪和の設備と医者では無理だということで、袁で待っていた救急車にまた乗せて、阪大の脳神経外科の方へ運ばれた。マア、やむをえない回し方だろう。

最近は救急車や病院などの受け入れ体制は以前より良くなったようで、扇される時間帯も、まだ電車が動いている頃までだという。

また、素人目に見ても一針か二針縫ってすぐ帰らされるような傷人は、歩いて帰ってこれるような大和か宮永に運んでもらうように言うと、救急隊の方でも心得ていて、遠くへは運んでない。

もっとも、市街でパトロール隊が救急車を呼んで乗せた人は、見た目には二針縫って帰されるような傷だったのだが、大和へ行って診察した結果、頭蓋骨にヒビが入っていて入院する、というような例もあるから、やはりモチはモチ屋で任せた方がいいようだ。

一番入院の多いのは阪和病院。

⑥病院

割に評判のいいのが結核専門の広澤病院。ここは大体二人室が主体で、テレビを見る室もあり、日用品も廊病の人が当番制で近くのスーパーから買ってきてくれる。

反対に、救急車に乗る前に、あすこに運ばれるんやったらいやや、という声のでるのが大和病院。

なぜかというと、大和病院は安の労働者を犬コロよりまだ下にみてる、お前らみたいなん病院で治療するのもったいない、というような言い方をするからだそうだ。

大和病院の面会や外出時間などの各種規則は、患者の都合によって決められているのではなく、病院の経営方針によって決められているのだ、というのは大和病院に勤めている人達の口グセのようだ。

マ、病院には色々不満もあるが、それらは追々団結して改良して行くことにして、当面は次のことを忘れないように。

病院に着いたら、行路で行った場合は衣類が支給されることになっているので、先ず清潔な下着に着換えること。病院のカウンセラーかそれがいなければ看護婦に、病院は殺菌でっしゃろ、ワイのは菌おおいんちがいますか、いうて見せるのが一番早い。相手が女性の場合は、中身を見せないようにすること。

また、行路でいけば一万なにがしかの手当が支給されるはずなので、額が少くて不満だけども、それを受け取ること。

そして退院する時には、必ず医者に便箋にでも療養を要する旨書いてもらうこと。（診断書なら金がかかる）それを持って市更相に行き、自弧館に入れてもらうこと。

二ケ月も三ケ月も入院生活をやってたら、退院してすぐにはキツイ日雇い仕事も出来ないのだから、退院する時に医者から市更相へ提出する手紙をもらって、自彊館に入って、働けるよう体調を整えるようにしないと、ただブイッと退院したのではまたもとのもくあみになってしまう。

⑥その他

以上の他に、結核の人で三五条適用で入院した人の未払賃金を生駒の飯場まで取りに行って病院に届けたり、会社の手違いで日雇健保の印紙が足らなかったのを会社と交渉して訂正させて健康保険がきくようにしたり、入院した人に頼まれて親戚に連絡をとったり様々のことをしている。

以上で越冬実医療班の紹介を終わるが、最後に医療班からのお願い。

救急車に乗るときや市更相から入院するときなど、追跡カードというハガキを各人に渡しているので、それに本人の名前、病名、病院または施設の名前住所を記入して投函して下さい、とのことです。あとで集計したり、行路の手当の手続きを病院がしてくれない場合など、医療班の方で手続をする都合などがあるからです。

また、二月二〇日に全港湾のモチ代が支給されるので、手帳を持っている人で入院してる人は、全港湾に電話すると届けてもらえるということです。

しかしマア、二月末でパトロールが終わると、どういうことになるのでありましょうか。マア、ここで紹介したような手順（医療センター→市更相→自彊館・病院）を、自力で踏んで、なんとかシノグ算段をする、ということですかな。病魔退散・御敵調伏。

※この稿は、越冬実医療班の山口さんから一時間程話をしてもらったのを基にしてまとめたものです。聞き違い、思い違いなどがあるかもしれません。

一日平均一三回の出動数

西成消防署海道出張所救急隊

釜にいれば一日としてピィポ、ピィポという救急車のサイレンを聞かぬ日はないほどだが、あまり救急行政についての知識は多くないようだ。救急車に運ばれて病院に行くとどうなるのか、また、どのように運ばれるのか。

海道出張所を訪ね、西成消防署消防司令補の岸さんと一部の救急隊長河添さんにお話を伺った。

①西成区の救急行政の概略

西成区内には現在救急車が、西成消防署と海道出張所に各一台ずつ、計二台配置されており、西成区の救急行政を主として荷っている。ただし、人間が仮死状態に入って蘇生の可能性が高いのは三分間だということで、三分救急が目ざされていることいい、西成区内で発生しても市の救急隊が来ることもある。そうでなくても、市は他の救急車が二台とも出動中の時には、他から救急車がくる。忙しいときには、入れかわり立ちかわり一〇台ぐらい入り込むこともあるそうだ。

海道出張所の出動回数は一日平均一二～三回で、大阪市の基準である一台当り九二四件に比べ[illegible]と倍近い出動数である。

一回出動すると事務整理など入れて平均七〇分の時間がかかるそうだから、一三回出動すると一五時間一〇分、それに車の整備・消毒の時間なども必要なので、平均仮眠時間は二時間程度だという。

ちなみに、一日当りの出動回数が一番多い日というのは正月期間で、一昨年が一日三二件、昨年二八件、今年が二〇件だったという。年々減っているのは長い不景気で人が減っているせいか？

ついでにさきに数字をあげておくと、一日の中で出動の多いのは、午後九時から午前〇時、そして午前一〇時から一一時、午後一時から二時と三つの山を成しており、一番落ち込んでいるのが朝方の五時、六時台。曜日では日曜・月曜が多い。

救急車で運んだ病人を内科・外科で別けると、発生の六〇%が内科で、肝硬変、急性腹痛症、急性アルコール中毒症などが多い。

程度で別けると、軽症が六七・八%（大阪市全域では六一・七%）、中等症（一日入院）二〇・五%、重症一一・一%（市内一・二%）死亡率〇・六%（市内一・二%）―この死亡率は、運んでいる途中、あるいは運んでから死亡したもので、最初から明らかに死んでいたものは入ってない。―

男女比率は八〇対二〇で男が多い。

発生率で大阪市全域と比べると、大阪市全域より多くなっているのは、犯罪・一酸負傷、急病。外科系が多い。

年令別では四〇才台が一番多く、七〇才、五〇才、六〇才がそれに続く。市内では二〇才台が一番多い。

地区別では、萩ノ茶屋一丁目（総合センター付近）、二丁目が多く、次いで萩ノ茶屋三丁目（三角公園とそのあたり）、大子（カスミ町交叉点から東）となっている。

②救急車の出動まで